

鬼のひとり娘 大阪府

むかし、鬼にひとり娘がいて、その娘が、初めて人間を食べる年ごろになりました。ある日のこと、鬼は、街道筋かいどうすじをきれいな男が通ると聞いたので、娘を連れていきました。そして、

「おまえは初めて人間を食べるんだ。今ここを、きれいな男が通るそうだから、その男を食べてしまえ」といいました。娘は、

「いや。恥ずかしいから、いや」といいました。

「そんなことをいわないで、食べるんだ」

「おとうさんがそばにいてくれるんなら、食べるわ」

そう話していると、向こうから、きれいな男がやって来ました。あんまりきれいな人なので、いくら鬼が、

「さあ、食べる。そら、食べる」といっても、娘は、恥ずかしくて食べることができません。男のほうも食べられると困るので、

「それなら、私と勝負をして、あなたが勝ったら食べてもらいましょう。あなたが負けたら、ここを通らせてもらいますよ」といいました。

そこで、鬼が行司ぎょうじになって、娘と男は、腕相撲うでずもうをすることになりました。男は強くて、娘はすぐにひっくり返されてしまいました。

そこで、次に足相撲あしずもうをしました。やっぱり男が強くて、娘はひっくり返されてしまいました。鬼は、

（これでは、食べる食べるといっても、食べられるわけがない）と思って、家来の鬼をふたり連れてきました。そして、こちらは娘と家来の三人で、あちらは男ひとりで、向かい合って、首にひもをかけ、ぐうっとひっぱり合って、首相撲くびずもうをしました。それでも男が強くて、鬼はみんなひっくり返されてしまいました。

男は、そこを通っていってしまいましたとき。

おしまい

村上郁 再話

